白梅学園短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　№11　22～32（2006）

学生が生きる子育て支援

瀧口　優・瀧口　美智代

1．子育て支援とは何か

子育てを支援するという発想は当然のことながら古い歴史を持っている。というか子どもが存在するところ子育ての支援は行われてきているのは事実であろう。しかし「子育て支援」という文脈で使われるようになったのはいつごろなのだろうか。「親および家庭における子育て（養育）機能に対して，家庭外の私的・公的・社会的機能が支援的にかかわること」（保育用語辞典 2004）とあるが，国のレベルでは 1994 年の 4 省（文部・厚生・労働・建設）による「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」や 1999 年の 6 省（大蔵・文部・厚生・労働・建設・自治）による「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」等が基本になっているわけで，比較的新しい概念として注目されている。

しかしエンゼルプランにしても新エンゼルプランにしても「対症療法」（金田他 2005）の域を出ないし，結果として当初のねらいであった少子化に歯止めをかけることができず，「子育て支援」が実質でないことが露呈したと言っても過言ではない。子育ての支援は，あくまでも育つ子どもや育てる親の立場にたって行われないかぎり，決して効果が上るものでないことを示しているともいえる。

現在行政がすすめている「子育て支援」は，保育所入所定員枠を増やしたり，低年齢児保育や延長保育，一時保育等にとどまっている。一人一人の子どもたちの発達や未来についてしっかりとした保障をするものでないことは育てる親から見えているからであるし，何よりも「子どもを育てたい」と思える社会になっていないことが日々の現実だからであろう。

しかし行政の対症療法的な対応の一方で，直接子どもや親を相手にする保育所や幼稚園，あるいは小学校や養護施設などは，要求に根ざした取り組みを通して親や地域の信頼を手に入れてきていることも事実であろう。

本稿では，養成校として長い歴史と伝統を持つ白梅学園が，短期大学の保育科に加えて四年制大学の子ども学部を立ち上げ，学生を長期的視野で育てることが可能になり，「子育て広場」という子どもと直接に関わる場を組織しはじめたことを踏まえて，学生が主体的に関わり育っていく子育て支援のあり方について考えてみたい。

また，子育て支援の「子ども」を，文字通り「子どもの権利条約」で定義された 18 歳未満として，単に乳幼児だけでなく，高校生までを視野に入れた子育て支援として展開したい。子ども学部においては小学校教員の免許取得が可能となり，これからその道にすすむ学生も予想されるし，学園としては白梅学園高校及び 2006 年 4 月開学の白梅清修中学を敷地内に持っている教育機関として，十分その対応が可能であるという前提である。

なお，乳幼児の子育て支援については，子育て広場の「あそぼうかい」で子どもや学生と関わってきた瀧口美智代が担当し，同じく子育て広場の小中学生の部を担当した瀧口優が後半の部分を担当する。　（瀧口　優）

2．子育て広場「あそぼうかい」などと乳幼児の子育て支援

1）小平市の子育て支援の実情

小平市は，東京都の多摩地域の武蔵野台地上に

あり，都心から26キロ離れた緑豊かな地域である。そして，小平は，学園都市として街づくりが進められてきた町でもある。昭和初期には，現在の津田塾大学，一橋大学小平キャンパスが移転してきた。戦後には，白梅学園短期大学も開校し，現在は，7つの大学，6つの短期大学，9つの専修・各種学校のある学生の多い活気に満ちた学園都市になった。

人口は現在約177000人，外国人は約4000人が住んでいる。年少人口（0歳～14歳）は，平成14年の統計で24906人，人口比14パーセントで，今後，子どもは若干増える傾向が予想されている。小平市の教育分布は，小学校が21校，中学校が10校，高校が7校，養護学校が2校ある。幼稚園は，私立のみで15園，保育園は公立が10園，私立が11園ある。また，小平市は，地域の子育て支援事業に力を入れている。幼稚園のアットホーム事業（保育園とほぼ同じ時間帯での預かり保育）をはじめとして，子育て中の親を対象にした，子ども家庭支援センターでの親子の交流広場，ふれあい広場，子どものつどい広場などの施設などがある。子育て相談には，幼稚園・保育園や施設だけでなく，子育て知恵袋事業の相談員38人が対応している。子どもショートステイ・緊急一時保育，ファミリーサポートセンターなどの活動も展開している。児童手当は小学校3年生まで，乳幼児の医療費助成は4歳未満児まで行われている。

民間の子育てサークルでは，白梅子育て広場のパートの一つである「きらら」が小平市の子育てサークルの中心になっている。講座などを通じて，「るんるん子育てネット」や「らいおんキッズ」が設立された。白梅で教鞭をとられていた岡本富郎先生の夜間市民講座からは「小平パパネット」が誕生し活動を続けている。

2）「あそぼうかい」の誕生と活動

(1) 白梅子育て広場の概要

白梅学園短期大学では，2004年度から白梅子育て広場設置委員会を立ち上げ，2004年の6月から，学生のゼミや授業の実践の場として，また，地域のニーズに応えていく，という視点から子育て広場を学生とともにスタートさせた。2005年度になって，教育・福祉研究センターに子育て広場運営委員会を位置づけ，実践教育指導員を置くようになった。子育て支援事業をセンターの主な事業として，2005年度から予算もついている。白梅子育て広場設置委員会は，現在運営委員会として，専任教員，非常勤講師，幼稚園副園長，NPO法人，担当職員から構成され，月に一度話し合いの場を持っている。

2004年度の子育て広場は，前期が4回，後期は，7つのパートに分かれて学生指導にも力を入れた活動を本格的に始めた。2005年も引き続き，「あそぼうかい」は，学生の自由意志によって参加できる広場として，学科，ゼミを越えて，広場に参加している。その他に，ゼミ生が中心になっている「世代間交流の広場」「オレンジペコー」，アスペルガーの青年や自閉症児などの障害児を対象にした広場が活動している。また，白梅幼稚園の「ひよこの会」，小平市の子育てサークルの柱になっているNPO法人「きらら」の広場や小学校の教師や保護者を対象にした子育て交流会を開催している広場がある。

2004年度の参加者総数は，教育・福祉研究センターの資料によると，参加学生は293人，親子が714人，シニアが25人，教員は，グループによって違うが，学生が自由に参加できる「あそぼうかい」は3人，「あそぼうかい」と「世代間交流の広場」の合同広場では，約10人が参加している。また，教育・福祉研究センターの広場担当の職員も2人から4人が受付や記録などで参加し，日常的には，資料の作成や名簿の管理，広報などに当たっている。

2005年の「あそぼうかい」は，4月，6月，10月と3回開催し，今後は，12月と2006年に1回の2度の計画がある。今年は，毎回，学生の数は60人前後と多い。子どもの数は10月が37人だっ

た。

尚，「あそぼうかい」の教員は，2004年度から引き続き，代表が保育科の小松歩助教授，担当教員として佐久間路子専任講師，そして，児童文化クラブの顧問の瀧口優助教授，実践教育指導員の瀧口美智代が協力者として学生の指導に当たっている。

表　2005年の白梅子育て広場の活動

グループ名	活動回数	学生の参加形態	教員配置	親子の参加	運　営
あそぼうかい	年5回	自由参加	3名	自由参加	学生が企画
世代間交流の広場	年5回	ゼミ主導型	2名	自由参加。高齢クラブ，ケアハウスに参加依頼	学生の企画を尊重
オレンジペコー	毎月1回	ゼミ主導型	1名	親子限定	ゼミでの指導
気になる子どもたち	毎月1回	ゼミ主導型	1名	地域の会の親子	学生の企画を尊重
ひよこの会（幼稚園）	毎月2回	卒業生の援助	幼稚園の教員2～3名	年間契約（随時受け付け）	幼稚園
NPO法人きらら	毎月1回	ゼミを中心にした参加	きららの方6名程度	自由参加	きららと委員会の代表
児童・生徒を対象とした子育て広場（講演）	年3回	自由参加	1名	自由参加	担当教員と地域

(2)「あそぼうかい」のあゆみ

初期段階

前期の初期段階での「白梅子育て広場」は，白梅幼稚園の園庭開放に参加する形で行った。保育科や心理学科の学生が広場に取り組んだ。教員は，3人から6人，学生は10人から20人が参加し，砂場や水遊びなどの外あそびに重点を置きながら，七夕さまなどの季節感を取り入れた工作を学生が前もって準備をした。親子に好評だったのは，家庭では味わえないダイナミックな水あそびとスイカ割りで，学生も水でびっしょりとなりながらエネルギーを注げたあそびだった。

広場の最後に，終わりの集いを毎回設けて，学生が司会を担当し，紙芝居や絵本の読み聞かせ，手あそび歌を親子で楽しめるように，学生たちは心を砕いた。また，教員が園庭で受けた子育て相談も親にはまずまずであった。

充実期　分化した広場

前期の白梅子育て広場を継承した「あそぼうかい」は，心理学科の学生を中心に10月から始まった。乳児と幼児のグループに分かれて，それぞれのコーナーを担当教員と試行錯誤し，当日の広場に向けて準備を進め，3回開催した。シニアとの交流をメインにした「世代間交流の広場」は保育科のゼミが中心になって，高齢クラブの方々との交流を進めた。チョウチョづくりや竹とんぼづくりの指導をしてもらうなど，広場は2回の開催だったが，シニアのお宅へ訪問して，シニアの方の輝いている姿に驚いたり，シニアの考え方を実感したりする場ともなった。

発展期　合同広場

学生が自由に参加できる広場「あそぼうかい」に集う学生は10人以下と少なく，当日に集う約

30組の親子の支援に困難な状況が生まれた。ゼミ主催の「世代間交流の広場」では，子どもを独自に集めるのが大変な状況もあって，2005年3月，合同の白梅子育て広場を開催するに至った。学生への認知も少しずつ広がり，学生会の会長が参加していたこともあって，友だちの輪は大きくなっていった。心理学科と保育科の学生から福祉援助学科，教養科にも参加学生は広がっていった。また，心理学科の有志が広場を教職員に知ってもらいたい，という思いで取り組んだカレーパーティーは，学生のねらい通りになり，合同広場への教職員の参加は増えた。参加学生は40人，子どもは55人，親が39人，シニアが17人，教職員が10人以上の広場になった。

2005年度は，新たに設置された大学の子ども学科の学生が，日常的に約20人活動するようになり，4月と6月の2回，合同広場を開催した。全学科の学生と卒業生が参加する広場になった。

創造期　学生主体の広場

10月からは，「世代間交流の広場」と分かれて，「あそぼうかい」は単独での広場になった。保育科2年生（小松ゼミ），保育科1年生（小松ゼミ，佐久間ゼミ，瀧口ゼミ），心理学科2年生（佐久間ゼミ），教養科，児童文化クラブ（子ども，福祉援助）の学生たちを中心に広場は開催されることになった。児童文化クラブは白梅子育て広場に参加したいと思っている学生たちが集まっていて，日常的に手あそび歌やパネルシアターなどの練習をしている。他のゼミとの間に若干の技術や広場への思い入れの違いがあり，学生同士のつながりの難しさが表面化した。

また，教員が事前の作業に十分にかかわれなかったことが学生に不安感を抱かせ，準備に戸惑いを感じさせる側面も見られた。学生が主体的に運営していくには，全体の運営とコーナーづくりの企画の段階で，乳幼児の発達や児童文化財の視点を学生に伝えながら，ともに考えていく時間が，現在はまだ求められていると感じられた。

しかし，10月の「あそぼうかい」で，はじめて，学生が案内のチラシを白梅学園の近所に配ったり，ポスターを商店やマンションに張らせてもらったりした。この活動は，学生のつながりを深め，学生の主体的運営に向けて，飛躍できるきっかけを育てたと言える。

2005年10月からは，「あそぼうかい」単独になったが，高齢者を主体にした広場と，乳幼児の親子を主体にした広場では視点が違うことも事実なので，学生の主体性を考えると，各々の視点を大切にして企画することが学生にとっては運営しやすいのではないかとも思える。

(3) あそびのコーナーづくり

あそびの内容は初期の段階では，教員主導型で進められた。2004年後期になって「あそぼうかい」が誕生すると，学生と教員が乳児と幼児のあそび内容について話し合う時間を持つようになった。教員の専門性が活かされ，あそびの展開にも工夫がされるようになった。とくに子どもに人気が高いあそびは「魚つり」で，毎回さかなの種類には気を配ったり，色塗りや水族館などとあそびが発展したりする方法を学生と教員で話し合いながら準備を進めていった。

また，親からの要求もあったフィンガーペインティングでは，担当教員の小松先生が食べても安心できる絵の具作りに挑戦するなど，教員の専門性が毎回，活かされるようになってきている。学生も専門の先生に自ら相談に行くことが増えてきた。

小麦粉粘土は，子どもやシニアに好評なコーナーである。2004年6月の「合同広場」では，教養科の子育て支援論の授業で小麦粉粘土を試作した学生たちが広場に臨んだ。学生たちは子どもたちが口に入れても大丈夫なように，色付けに，ターメリックやお茶，ココア，パプリカなどを使って実験を繰り返し，食べて味を確かめ，色づくりを工夫していった。

工作では，季節感のあるものを学生と教員が考

え，七夕飾り，ビニール袋の凧，色画用紙のリースなどを準備した。また，ひょろひょろへび，紙コップカーなど子どもの発達を意識して教員が提案し，選んだものもある。学生が図書館で借りた本の数冊から考え出した「パッチンボード」は，子どもの安全性に問題があり，何度も修正を重ねながら使った。学生のアイデアや思いを大切にしたり，失敗させたりする経験も大切であるが，安全面を意識させることは重要であり，工作のコーナーづくりでは，あそびの発展，安全面，子どもの発達などを考え合わせると，教員が話しあいや作業に関わる必要性は高いと思われる。

さらに，コマ，あやとり，おてだまの昔あそびは，「世代間交流の広場」との合同広場で充実したコーナーであった。ままごとは子どもが道具を取り合い，けんかに発展することもあって，学生がパニックに陥りやすいコーナーだが，子どもを引き離して，あそびの転換をしようとする学生なども見られた。また，木製のままごとに親やシニアが関心を持つことに学生はびっくりしていた。実習とは違った場面の経験を「あそぼうかい」は学生に提供していると言えるだろう。

「あそぼうかい」では，初期段階から継続している終わりのつどいで，歌や手あそび歌，紙芝居や絵本の読み聞かせを重ねてきた。最初は保育専攻科の学生たちが練習なしで頑張ってくれたが，その後，前もって練習をするようになった。「あそぼうかい」では，てあそび歌のレパートリーも増えてきた。児童文化クラブの学生たちは，実習に行ったときに幼稚園の先生にてあそび歌をやるように言われて，すぐに応えられたことが嬉しかったと話している。「あそぼうかい」を通じての子どもの文化財の獲得が学生の指導・実践能力を高めていることは，疑いようがない。

(4) 子育て広場から広がった地域活動

小平市立第6小学校の「ふれあいマンデー」の参加，小学校での学習支援ボランティア，2005年度からは，大学の子ども学科の学生を中心に，中学校の「総合学習の時間」での保育の授業，小学校の音楽の時間での手あそび歌の指導やPTA懇談会での「子ども教室」などにも関わってきた。小平市の学生ボランティア登録者は，子ども学科，教養科，福祉援助学科，保育科の学生たちと卒業生で30名を越している。現在，子ども学科と保育科，教養科の学生が行事や学習支援の活動を展開している。子ども学科の学生たちを中心に，知的障害者の施設へのボランティアや小平市立第6小学校のよさこいの踊りにも参加している。当初は，教員の指導を必要としたが，現在は，学生たちが情報を交換しながら，地域に関わっていっている。

3)「あそぼうかい」と学生

子育て広場が始まった2005年6月から参加学生に感想文を記入してもらっている。感想文の用紙は，最初，企画調整室が作成したり，教員が作成したりしていたが，合同広場を開催するころから，学生が自分たちの記入しやすいように，また，次回の広場の運営に向けて分析しやすいように作成するようになっている。1回目から2005年10月までの感想文をもとに，学生が「あそぼうかい」へ参加して感じたことや学んだことを整理し，学生の子育て広場への思いと，どんな点で成長しているのかを明らかにしたいと思う。

(1) 広場への期待

「あそぼうかい」に集まってきた心理学科の学生は，親子関係について感心を持っている人が少なくない。

「親子関係について学びたいと思うようになってからもなかなか小さい子どもと接する機会はなかったので，いろいろ接し方で戸惑ったこともありますが，毎回とても勉強になっています。(心理学科2年)」「前期のときの広場では，お母さんたちと先生が話すことをやっていたけれど，それも続けてほしいし，お母さんたちからいろんな話

を聞きたいと思います。(心理学科2年)」「シニアや子どもとふれあうだけでなく，子どものお母様とあやとりをしました。お母様方と話すことができて嬉しかったです。(心理学科卒業生)」

子育て支援論の授業を通じて，学生は，親の気持ちや大変さ，喜びにふれるときに，子育てを身近に感じ，考える機会を得ているように思われる。「あそぼうかい」に参加した学生たちは，お母さんたちに共感し，子育てへの距離を縮めている。

(2) 学生が楽しむ広場

学生に「広場で楽しんでください。スマイルで。」と当日の朝，私は学生に挨拶する。自分が楽しい気持ちにならないと，顔には笑顔が生まれない。子どもは，学生がゆったりとして，スマイルがあると落ち着く。学生たちの多くは，担当したコーナーで子どもと楽しんでいる姿が感想文に綴られる。「子どもと接することに苦手意識を持っていましたが，いざ遊んでみると子どもたちのいろいろな面を見ることができ，面白いなあと思いました。実際に子どもと関わることでより理解が深まったと思います。(心理学科2年)」，「小さい子と触れ合うことができて，とても楽しかったです。すごくかわいくて赤ちゃんがほしくなりました。機会があればもっともっと小さい子に関わりたいと思います。(保育科1年)」，「子どもたちと一緒にあそべてすごく楽しかったです。(子ども学科1年)」

(3) 学生の気づき，自己の発見

子どもとのかかわり，ゼミや学科を越えての交流は，学生の見る目を豊かにしていることが理解できる。一つのことを共同してつくり上げていく作業は，学生たちにアドラーが言う共同体感覚を育てていると考えられる。理解力，論理力の発達が次の目標を計画する行動に発展していることが，感想文の字間からも読み取れる。

「一つの企画を大勢で創り上げることは，よい自己成長の場になりました。いろいろな学科の人と交流できたり，話し合いの中でさまざまな意見や考え方を聞けたり，なるほど！と思うことがたくさんあって，学ぶことが多かったです。(心理学科2年)」，「子育て広場（あそぼうかい）に参加して，子どもと関わったことで自分自身の性格や行動についても振り返る機会が得られた。たとえば，子どもにとって有効であると分かっていても人の身体に触れることにはためらいがある自分に気がついた。気づくことができると，次の目標がはっきりしてきて，頑張ってみようと思えた。少し勇気を出して，子どもの傍によりやさしく声をかけると，その子は笑顔を見せてくれた。(心理学科2年)」，「4月に来てくれた子がまた来ていて，その成長を見ることが出来たので良かったです。(5ヶ月の子，寝返り→7ヶ月，座る）私は準備段階でほぼ初めから参加できたことで，話し合いを重ね，どんどん向上させていく事ができ，すごく勉強になりました。(子ども学科1年)」，「もっと乳児との会話の仕方や遊び方を事前に学んでおけばよかったと感じた。折り紙コーナーに移動してからは子どもをほめることの重要さを強く感じた。(心理2年)」「スキルアップが図れてよかったと思います。子ども一人ひとり特性が違い，抱っこが好きな子，嫌いな子のようにみんな違うので子どもに応じた対応ができるようになりたい。(子ども学科1年)」

(4) コミュニケーション・交流の発展

合同広場や「あそぼうかい」では，シニアの人とのかかわりがあり，多世代間交流を学生は経験した。コミュニケーションの意味を感じ取った学生も少なくない。お母さんやお父さんとの交流から学ぶこともいろいろあったようだ。

「子どもたちよりもお年寄りの方々とたくさん話をしました。めったに聞けない話を聞かせてもらいとても勉強になりました。年齢の違いにより，ものの考え方，捉え方がまったく違うことを学びました。(保育科2年)」，「お年寄りが学生や子どもたちと遊んだりしているときの顔がとても生き

生きしていて，こういう交流の場は大切だと感じました。シニアの方と話すきっかけに小松先生から「シニアの方達に話を聞いたり，教えてもらったりしてみたら…？」というような言葉をかけて頂きました。（子ども学科１年）」，「今までは，『何かしてあげなくてはいけない』という考えでした。でも，シニアの方達は自分よりもたくさんの経験をされていて，知らない事も知っていて…。一緒に会話をするというのは，お互い楽しく話し合える事なのだと感じました。（子ども学科１年）」，「自分のおじいちゃんやおばあちゃんと同じ世代の方と話して，参考になりました。また，遊びたいと思ったのと，今まで持っていた印象が変わって楽しくなりました。（心理学科２年）」，「今回も子どもの親が子どもにかけている言葉などで（あっ，こういうのはいいなあ）というのがいくつかあったので，次回に生かして生きたいと思いました。（保育科１年）」

４）学生の成長と課題

(1) 子ども理解の深まり

参加を重ねるごとに，子どもの対応が見学から，臨機応変な対応に成長してきている。会場入り口からの誘導，泣いている子どもへの働きかけ，けんかをしている子どもへの対応，気分転換のさせ方など，子どもにどう対応すればいいのか，悩み，考えることができるようになってきている。初期の段階から参加している教養科２年生の感想文には，子どもへの具体的な関わりの試行錯誤が見られる。

「子どもたちが楽しく遊ぶためにどうやって気持ちをひきつけさせるか実際自分で作って見せてみたり（二人あやとりを）一緒にやろうと言ってみたりして実験してみました。」

また，2004年度中心に開催してきた心理学科の卒業生たちも現在も受付を担当するなど手伝ってくれているが，「他の人がかかわっている姿を見て，学ぶことができました。」と感想文にあるように，子どもを理解しようとするゆとりが生まれていると言えよう。

(2) 学生の主体性の発達

学生たちも教員も初期段階，充実期では子どもや親にどんなことを提供すればいいのか試行錯誤の連続だった。この頃は，学生と教員が一緒に話し合い，作業も一緒に行うことが多かった。学生の人数もゼミの人数ぐらいで，学生と教員の意思疎通もとりやすかった時代だった。

しかし，合同広場になると，全学科の学生が参加し，50人を超す学生が子育て広場に関わるようになった。組織的な活動が求められるようになり，課外活動室を学生課で日常活動の場として借りて，そこで，心理学科の学生たちを中心に，学生たち自身が広場に向けての段取りを話し合い，資料を作成していく筋道ができてきた。拠点が与えられたことは，学生たちが主体的に活動する機会を得たと言える。全学科の学生への呼びかけや教員へ広場の活動を知ってもらいたいと，カレー・パーティなどのアイデアを次から次に出し合い，広めていった。学生会で中心的に活動している学生が参加していたことは広場を広げていく上で大きな力となった。彼女たちは，一方で備品の管理や記録することにも目を向けていった。

「あそぼうかい」が大好きであること，白梅学園が好きであること，教員との密な交流と信頼関係を育てていた心理学科の学生たちだからこそ，教員のサポートを受信し，主体的に関わり，喜びや感動の場面が積み重ねられ，自信を育てていく結果になったと思われる。卒業生は現在も関わっているが，2005年４月以降は新たな集団づくりが求められている。現在は，白梅高校に在学していた頃に，大学に進学したら白梅子育て広場をやりたいと希望して集まってきた学生が中心になって，全体の運営を考えるようになっている。そこには，子どもが好き，広場への愛着などがある。学生の主体性の発達は，そこに寄与しているといっても過言ではないだろう。

(3) 技術・文化性の向上

ゼミや授業を中心に子どもの見方，対応の仕方，親へのかかわり，あそび，工作，絵本の読み聞かせ，紙芝居，てあそび歌などを学生たちは学んできているが，「あそぼうかい」を開催するに当たっては，もっと技術を習得する必要がある。また，全学科で活動し，ゼミの枠を外れて参加する学生みんなが習得する技術も必要になってくる。今までに，事前学習として，子どもの歌（秋山），安全教育（佐々），車椅子の乗り方（西方，杉本），星のつくり方（八木），工作（花原，杉山），気になる子どもたち（堀江，瀧口美）など，必要に応じて学内の先生方に協力してもらいながら事前学習を進めてきた。また，児童文化クラブでは，保育専攻科の卒業生が学生たちに人形劇やパネルシアターの指導をしている。

地域に開かれた大学の子育て広場として発展させていくには，学生の技術向上に力を入れていくことが大切である。担当教員が意識して事前学習や日常的な指導を心がける必要性が求められている。

たとえば，絵本コーナーに子どもたちはなかなか集まってこない。教員が準備する事前学習の不足が指摘できる。子どもたちはどんな本を好んでいるのか，子どもに関心を持ってもらう方法，絵本の読み聞かせの仕方，絵本と子どもの発達の関係など学生に伝えることはたくさんあるが，私も含めて十分な指導を学生にしてきていない。子どもの愛読絵本第1位にランクされることが多い「ぐりとぐら」についても絵本の持っている特異性ついて伝えていない。読み聞かせの技術向上と絵本を選択する文化性を育てていくことは今後の教員の指導課題である。そこから学生との共同作業が始まる。

(4) 自己実現

感想文に見られるように，「あそぼうかい」は，子育て広場という一つの企画を学生が協力し合って，つくり上げていくイベントである。現代は，コミュニケーションのとり方がなかなか分からない学生が増えているが，「あそぼうかい」は，他学科の人と交流したり，話し合いや作業を一緒にやったりしながら様々な意見や考え方にふれる空間になっている。心理学科の2年生は次のような感想を寄せている。

「多くの人たちが参加するイベントを創り上げるためには，周囲の人たちと協力し合うことやさまざまな状況を予測し，備えること，当日も含めて，片づけまで見通した計画を立てることなどが重要だということが身にしみてわかった。大変だったけれど，準備してきたものが形になるという日がやってきたときのわくわくした気持ちや期待感，無事に終了したときの安堵感や達成感は，気持ちいいもので，次回も関わりたい，もっと工夫したい，という思いも出てきた。よい自己成長の場になりました。」

また，児童文化クラブで中心的に「あそぼうかい」に関わっている子ども学科の1年生は，「グループをまとめる力，判断力がもっと必要だと思いました。周りの人に支えられていることを改めて実感しました。」と綴っている。

学生たちは人とのつながりを深め合う関係を，話し合いや作業の中に見出しながら，喜び，大変さ，達成感を友だちと分かち合っている。そして，自分と向き合いながら，周りに感謝する心を育てていっている。学生たちの自己実現は「あそぼうかい」を成功させたいという目的に向かって，協力し合うことから始まり，その中でお互いに技術・文化性を切磋琢磨して高めあっていると考えられる。　（瀧口　美智代）

3．子育て広場「小中学生」等と児童生徒の子育て支援

1）子育て広場と小中高

子育て広場のスタートは2004年春である。乳幼児教育の養成校として今まで地域の子育て支援に大学として取り組んでこなかったこと自体に課題があったともいえるが，スタートできたという点では大きな前進である。

白梅の「子育て広場」の特徴は，今まで地域に関わってきた教員がその取り組みを持ち込んだこと，子どもたちの遊びを豊かにする場を設けたこと，世代間交流（詳しくは金田 2005）として多世代の発達を視野に入れたこと，そしてこれから述べる小学生や中学生，そして高校生を視野に入れた「子育て」を考えていることであろう。

小学生は今もっとも不安定な状態に置かれているといっても過言ではない。学習指導要領の改訂と揺れに左右され，ゆとりを求めた「総合的な学習の時間」（学習指導要領）が導入されるのと同時に，それが否定されるような「学力」への取り組みが行われたり，「総合的な学習の時間」と言いながら「英会話」に充てさせたりという状態である。学区の自由選択も東京都では80％以上が実施し，地域としてのまとまりをまったく失ってきているのが現状である。幸い小平市は市の方針として学区の自由選択はとらないで地域に根ざした学校づくりを目指している。

2005年3月に小平第六小学校の稲田百合氏（学校長：当時）に「小平における小学校の子育て支援を考える」として講演していただき（詳しくは瀧口 2005），第六小学校が取り組んでいる子育て支援の内容を紹介していただいた。それを機会に学生が小平市のすすめる小学生の「学習ボランティア」として第六小学校に足を運んでいる。

2005年7月には本学の西村章次教授に「気になる子どもの子育て、教育、そしてコミュニケーション―不登校問題にもふれて―」として，自閉症のこどもの対応から気になる子どもの問題について講演をしていただいた。自閉症だけでなく，ADHDやアスペルガーの問題と行政の対応についても展開し，小学生の問題だけでなく幅広く気になる子どもの理解を深めることとなった。

2）小学校・中学校と地域

前述のように，多くの市町村が学区の自由化（いわゆる学校選択の自由化）を実施し，地域という枠を取り外してきている中で，小平市はむしろ積極的に地域を組織しようとしている。白梅学園として関わりだした小平第六小学校でいえば，月曜日に「ふれあいマンデー」として地域に住むお年寄りが学校に出かけて，子どもたちに遊びを教えたり，読書ボランティアとして保護者が数多く参加している。

白梅学園としてもそうした地域の特徴を生かし，発展させるために積極的に関わっていくことが必要であろう。いずれは地域の大人，学校，児童・生徒，そして大学の学生が一緒になって地域づくりをすすめることができるようになれば，「学生が生きる」地域支援として大きな力になっていくと思われる。

今後の課題としては，学生が地域に「学習ボランティア」として関わり始めたことを視野に入れながら，白梅で培った文化を地域の小学生や中学生と共有し，協同での地域づくりをすすめられたらと思う。そのためには，日常的に文化を創造し蓄積していく場が必要である。「あそぼうかい」の準備過程で学んだ技術や知識が，既に一部生かされている反面，系統的に発展させる体制をつくるには限界があるので，学内サークルやゼミナール活動と日常的に連携した取り組みが必要である。また学園として地域の小学校や中学校，そこに学ぶ子どもや親にどのように関わっていくのか，地域づくりの方針を持たない限り学生が生きる取り組みにはなり得ないと考えている。（瀧口　優）

4．課題と展望―学生が活きることを主軸に据えて

筆者は，広場に初期段階の1回目から関わり，充実期からは，「あそぼうかい」と「世代間交流の広場」の両方で学生と担当教員と一緒に広場を企画し，開催してきた。2005年4月からは実践教育指導員という立場で学生の指導にあたってきた。

大学での子育て広場にはどんな意味があるのか，何をしなければならないのか，自問自答してきた。そして大学での子育て広場は，①地域に貢献する

こと，②学生が主体的に関わることができる実践の場，③ゼミや授業で学んだことを実践する場，④学生と教員の共同作業の場，⑤多世代間交流を通じて生きることを実感する場という役割があるように考えられる。

それでは，学生が活きる子育て広場には，何が大切かを今までの実践を通じて整理しようと思う。

教員の指導

とくに学科やゼミを越えて共同作業していくのは，時間的に学生同士が交流する場が持ちにくく，行き違いも多くなっていく。そこで学生をつないでいく糊のような存在として，大人である教員の働きかけが必要になってくる。場所や作業の日程の調整をアドバイスしたり，作業を学生たちと一緒にする時間を確保したりすることが求められる。作業を共にする時間が確保されているときの方が当然のことながら行き違いは少ない。

また，事前学習のコーディネイトやアドバイスも求められる。学生の技術水準や子どもの文化財，子どもの発達，親へのかかわりなどの学習に学内の専門家たちが協力し合えるのは，大学の広場の特徴であり強みでもある。

しかしながら，担当教員も他の教員と同じように，学内での多くの仕事を抱えている。学生が活き活きと自己肯定感を高めていくには，担当教員が子育て広場に関われる時間の保障が不可欠である。

日常的な活動

学生が活き活きと子育て広場に関わっていくには，まず，拠点が必要である。現在，B棟の4階に白梅子育て広場の部屋が設けられている。狭いので，作業をするのは困難だが，道具や遊具をしまう保管庫としての機能は十分に果たしている。また，学生は練習などに使っている。

次に学生が話し合ったり，技術を交流しあったりする時間が日常的に大切だと思われる。当日に近くなって集まるのでは，学生は作業の手順もパニックに陥りやすくなる。常日頃の学生同士の交流や学生と教員の交流が信頼関係を築き，広場に愛着を持つようになっていく。それが学生の活きる広場づくりに発展していくと，今までの積み重ねから言えるだろう。

ゼミや授業との連携

気になる子どもたちの対応には，専門的に学んでいる金子ゼミや堀江ゼミがあたってきた。また，工作の授業は「あそぼうかい」に生かされてきた。筆者の「子育て支援論」の授業では，子育ての背景にある母親の喜び，不安，しんどさ，父親の労働状況などをデーターとお父さんの声を通じて推測しながら，親子に関わっていく視点を身につけてきた。ゼミの専門性や授業での学習を広場に反映させることは，ゼミや授業への取り組みにも積極的になり，「あそぼうかい」で学生が自信をもって取り組むことにつながる。

また，関連するサークル活動の蓄積も見逃せない。児童文化クラブは，人形劇を中心に学校や施設で上演活動を続けている「河童座」という劇団を輩出している。サークル活動で積み上げられてきたものを「あそぼうかい」につなげていくことも学生の力量を高めていく。

親・地域とのつながり

「世代間交流の広場」では，地域の高齢クラブのシニアと関わっている。「あそぼうかい」は，学生ボランティアを通じて，小学校や施設とのつながりを発展させてきている。また，回を重ねるごとに顔見知りの親子も増えていく。学生たちは，そういう親子とのかかわりを「あそぼうかい」で育てている。保育園・幼稚園の実習とは違った主体性を持った実践の場でのつながりができることで，さらに広場に愛着を深め，企画・準備の段階から学生たちは輝いていく。とくに，現場では親への対応が困難になってきているので，学生時代から親との信頼関係を育てていく手立てを広場で実感してほしいと考える。

また，「あそぼうかい」の案内のチラシを2005年10月に学生たちが配布した。それを見て参加した親子もいた。そういう形で地域に出て行くことも学生がのびのびと子育て支援活動で活きることになるのではないだろうか。（瀧口　美智代）

子育て広場のカリキュラム化

最後に子育て広場を大学のカリキュラムにどのように位置づけていくのかが求められてくる。いくつかの大学が，子育て支援の実践を科目として配置し，日常的に「子育て広場」的な状況をサポートしている。また，自治体と協力したり独自に子育て支援センターとして専任の教員や担当者を配置しているところもある。いずれはそうした方向も視野に入れながら，カリキュラムでは教養科の現代保育教養コース（及び現代教養コース）に設置されていた「子育て支援論」のような科目を，全学科の学生が履修でき，その中で実践的な指導も含めた子育て支援論が展開されることによって，より継続的，系統的な子育て支援が可能になるのではないかと思われる。

もちろん，「子育て支援」という名称を冠するだけでなく，カリキュラムの中に具体的に「子育て広場」が位置づけられることになれば，さらに豊かな子育て支援として発展していくのではないかと期待している。

将来的には大学で学びながら，学生が地域に出かけて行き，親や地域の子育て支援サークルなどと子育てそのものや特別支援教育の問題，あるいは不登校や非行問題，さらには進路問題等の学習会や討論会を自主的に開くというところまで展望したい。そうした活動までカリキュラムに組み入れるという展望を持ちつつ，教職員として地域に積極的に関わっていくことが今求められている。今学生たちは社会の現実を身体で受け止め，それを大学での学習や研究に結び付けていくという有機的な学びができなくなっている中で，「あそぼうかい」を含めた子育て広場のような実践的な学びをできる環境が求められている。カリキュラムとして実践的な内容を組み込んでいくことが今こそ求められているのではないか。　（瀧口　優）

〔注〕引用・参考文献

- 大豆生田啓友 2004 保育用語辞典 ミネルバ書房 p.325
- 金田利子・山路憲夫・瀧口美智代　2005　大学での「世代間交流広場」の実践　白梅学園大学短期大学　教育福祉研究センター　年報10号
- 瀧口優　2005　小平における小学校の子育て支援を考える　白梅学園大学　短期大学　教育福祉研究センター　年報10号
- 小平市社会福祉協議会『ふれあいシンフォニーいきいきプラン』p.56
- A.アドラー　岸見一郎訳『子どもの教育　共同体感覚とそれの発達障害，家族における子どもの位置』p.110-126　一光社